

て、之等の事から太陽面の微細な構造を形態学的な面からだけでなくスペクトル的にも追求の手を緩めなかった先生の姿を眺める時に、“これからの10年は0.1”をねらっての微細構造と磁場だよ”といわれた言葉に非常な重みを感じるのである。

先生が1943年以来ブラウンホーファー研究所の初代所長として活躍されながら、最近ではIAU第10委員会(太陽活動)の議長として在任中であつた事は、いろいろの集会や組織作りにも有能であつた一面をうかがわせるのに充分だと思ふが、同時に又非常に温かい心の持主の一面も持ち合せて居られることは先生の知己を得ている日本人の多くの方が異口同音に伝えるところである。

Solar Physics 誌(第43巻:1975)にブルチェック氏によって綴られている先生の思い出の中に、美しいものはすべて、特に古典音楽をたのしまれた先生の姿を伝えている。美しいそして全く静かなカプリ島の夕暮、海面に没する太陽を眺める一時、好んでフルートを奏して居



雑報 [I]

ケフェイドの“唸り”

周期の異つた振動を重ね合わせると、振幅が周期的に増減する“唸り”という現象が起きることはよく知られている。数年前オーストラリアのRodgersが、唸りを示すケフェイドU TrA(周期=2.57日)の質量、光度が、一般の種族Iケフェイドと異つていることに注意をして以来、周期が1日より長くて、しかも唸りを示すケフェイドの研究がすすみはじまつた。現在までに11個の星の唸りの解析がすすんでいるが、このうち1個(BC Dra)は種族IIとの疑いがあり、また1個(V 367 Sct)は銀河星団NGC 6649のメンバーとされている。変光周期は、1.9-4.3日の間に10個が分布しており、V 367 Sctは6.2930日である。

られたが、沈みゆく太陽を一人でボンヤリと眺めている淋しそうな私に「日本へ行ったら、お前の奥さんに伴奏してもらおうよ」とやさしい思いやりを示して下さつた先生も今はもうない。

私は今1975年2月10日付のブルチェック氏からの手紙を眺めながらこの一文を書いている。この手紙は1975年11月10日にキーペンホイヤー先生が65才の誕生日を迎えられるにあつて、かつてブラウンホーファー研究所で研究生活を送らせてもらった人々が、学術的な内容のものでも、研究所にまつわる個人的な思い出でも何れでもよから夫々の人が何かを書いたものを編集して、先先への誕生祝いにしたいので9月末日までに何か書いて送ってほしいという内容のものである。私も何かを書かなくては……と思ひめぐらしていた折に、あの5月の報に接したのである。今、全く趣きを異にした一文をものして、この誌上に掲載することになり、本当に万感胸にせまるものがある。

キーペンホイヤー先生の御家族

1973年10月、12年ぶりにブラウンホーファー研究所を訪問した際に、フライブルグ郊外のスタウヘンの先生の美しい御宅に招かれ楽しい一時を過した。その時は子供さん達(2男2女)の末の娘さんだけがまだ一緒に住んで居られたが、この方も間もなく結婚されると聞かされて、カプリ島で一緒だった時はまだほんとに小さい子供だった事を思い出し、歳月の流れの早さに驚いたのを記憶している。

V 367 Sctは、これまで周期の決めにくかつた星であつたが、最近EfremovとKholopovが唸りを確認した(IBVS, No. 1073)。この発見は、ケフェイドの脈動のモードが、周期7日と周期2-3日の2個所で切換つており、基本振動、第1倍振動、第2倍振動が順次励起されているのではないかとする仮説にとつて、ひとつの観測的証拠となるものである。

他方、唸りを示すケフェイドUTrAのモデルについてStellingwerfが数値実験を行つた結果(1975)は、第2倍振動を唸りは励起されないことを示しており、この結果に沿つて考えると、唸りを示さないケフェイドと唸りを示すケフェイドは異なつた質量・光度関係を持つ、別個の進化の経歴を持つグループであるということになる。この結果は、種族Iケフェイドの質量・光度関係に大きな影響を与えるので、なりゆきを注目したい。

(竹内 峯)